

ヘーゲル『精神現象学』 「序説」 第38節～第41節の解明

山口, 誠一 / YAMAGUCHI, Seiichi

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

13

(発行年 / Year)

2019-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022412>

ヘーゲル『精神現象学』「序説」

第 38 節～第 41 節の解明

山 口 誠 一

ヘーゲルの『精神現象学』「序説」第 38 節～第 41 節は、真理概念の転換を図っている。しかし、その精確な理解と重要性はともに見過ごされてきた。そこで、当該テキストの要約・邦語訳・注解を行い、その上で、近代哲学史の主要学説の系譜に以下の通り位置づけた。

学の体系第 1 部としての『精神現象学』すなわち精神の経験体系は精神現象を含んでいる。『精神現象学』は『論理学』との関係では、たんに非真理を否定するだけのように見える。そこで真理へただちに導かれたいと要求するかもしれない。偽である否定的なものにかかわる理由はないかのように見える。

だが、『精神現象学』序説では、偽である否定的なものへの問いが生まれる。というのも、真と偽についての通俗説が真理の門へはいることを妨害しているからである。通俗説からは、たとえば、デカルトの普遍数学やスピノザの幾何学的方法のように、これまで数学的あるいは幾何学的認識は、哲学の目標でありながら到達できなかったとされてきた。ところが、数学・幾何学で重視される区別の働きとは実体との不同状態という通過点にすぎず、到達目標にふさわしくない。

真なるものと偽なるものは、なるほど普通は固定した別々の実在である。しかし、真理は、鑄造貨幣とは違う。偽や悪は、個体実体でもないが、偽や悪には固有の実在性がある。こうして、偽は「他のもの」「否定的なもの」と規定される。しかも、実体自身が本質的に否定的である。そこから、まちがって知るという否定的不同状態は区別の働きであることになる。また、真理は区別から生成した同等性である。したがって、不同性は真理と不可分である。偽なるものは真なるものの構成要素ではないが、偽なるものと真なるものとは相互に外側から関係し合っている。真と偽という表現は、同と不同の場面では使われてはならない。真理の構成要素となった偽なるものは偽をもはや意味しないからである。

独断主義は命題に関する思い込みである。歴史年代、測定値、幾何学の定理には確定した答えや命題がある。それに対して、哲学的真理は、きっちりとして固定した独断命題にならない。

歴史記述的真理は偶然的現存にかかわっている。歴史記述や幾何学の真理にも自己意識の説明が関与している。科学的調査も自己意識の運動である。また、直接の直観による真理にも根拠が本来要求される。

【ヘーゲル『精神現象学』「序説」第38節～第41節要約・邦語訳・注解】

《第38節》

要 旨

精神の経験体系は精神現象をふくんでいる。『精神現象学』は『論理学』との関係では、たんに非真理を否定するだけのように見える。そこで真理へただちに導かれたいと要求するかもしれない。偽である否定的なものにかかわる理由はあるのか。だが、ここでは、偽である否定的なものへの問いが生まれる。真と偽についての通俗説が真理の門へはいることを妨害している。これまで、数学的認識は、哲学の目標でありながら到達できなかったとされてきた。真を偽から区別する働きとは実体との不同状態である。

(1) 精神の経験体系は精神現象をふくんでいる。

Weil nun jenes System der Erfahrung des Geistes nur die *Erscheinung* desselben befaßt,
 ところで、右のような精神の経験の体系がふくむものは、精神の現象にすぎない。

《注解》 いかにも精神の現象を含む精神の経験の体系は、論脈からは、学の体系第1部としての『精神現象学』である。しかし、ここで、学の否定的面と肯定的面とをそれぞれ第1部と第2部とに分ける論拠は提示されていない。『エンツュクロペディー』第2版以降、『精神現象学』は、さらに2つのタイプに分かれるが、どれも当該文の規定から外れていない。第一に、「精神哲学」の第2章としての「精神現象学」であり、第二に、学の体系第1部ではなくなった『精神現象学』第2版である。

(2) 『精神現象学』は『論理学』との関係では、たんに非真理を否定するだけのように見える。

so scheint der Fortgang von ihm zur Wissenschaft des *Wahren*, das in der *Gestalt des Wahren* ist, bloß negativ zu sein,

したがって、この体系から、真なるものという形態をとって存在する真なるものの学へ前進するということになる、これはたんに「前者を」否定することであるようにみえる。

《注解》 「真なるものという形態をとって存在する真なるものの学」が『論理学』であるのに対して「非真理の意識をその非真理において叙述すること」(*Phän.* S. 62) が『精神現象学』である。両者の学は、ここでは、体系の異なる部門に割り振られているが、やがて、論理的なものの二つの側面へと転換した。前者は思弁的側面となり、後者は弁証法的側面となった。この転換のさしあたっての機縁は、「自己を完遂する懐疑主義」(*sich vollbringender Skeptizismus*)を放棄したことにある。「自己を完遂する懐疑主義」という言葉から懐疑主義の四つの姿態がおのずと分節化されてくる。それは、①完遂されるべき原初の「自己」としての「絶望 (*Verzweiflung*)」、②「完遂すること」それ自体としての意識

の自己吟味③完遂された「自己」としての弁証法④それらの一切を取り集める「懐疑主義」とから成る。

まず、①の「絶望」という概念は、懐疑的方法の放棄によって、その固有性を否定されている。しかも、『エンツュクロペディー』第3版(1830年)では、さらに「絶望」という言葉そのものが削除されるに到っている。懐疑主義の放棄についていうと、いかにも『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』第36節では、「懐疑主義」が2箇所 で用いられている。だが、そのいずれから、「自己を完遂する懐疑主義」の方法を証示する原初的姿態を、もはや読み取ることができない。最初の用例では、『精神現象学』を特徴づける懐疑主義は、もっぱら「有限な認識することのすべての形式を貫いて遂行された否定的な学」(傍点筆者)と限定されてしまっている。この懐疑主義は、絶望が完遂されて、経験された道つまり上記の③の弁証法だけを意味している。その上で、この懐疑主義の自立性が否定し去られている。すなわち、懐疑主義が、そのような「否定的な学」として、論理学への導入を成すというならば、「懐疑主義は、ありがたみのない道であるだけでなく、何か余計なものであることになろう。というのは、弁証法的なものそれ自体は、すでにのべられたように肯定的な学〔論理学〕の本質的契機だからである」(GW 13, § 36)。ここから、懐疑主義の道は、弁証法的なものであるがゆえに、論理学の本質的契機であって、独立の学たりえないという主旨のことが読み取れよう⁽¹⁾。さらに、この主旨に立脚して、「絶望」という概念の固有性までも否定されるに到る。「そのような完遂された懐疑主義を要求するのは、すべてに対する疑惑(Zweifel)が、あるいはむしろすべてに対する絶望(Verzweiflung)が、つまり、すべにおけるまったき無前提性が、学に先行すべきだという要求と同じである。この要求は、本来からいえば、純粹に思考しようと決意する際に、すべてを捨象し、純粹な抽象つまり思考の單純性を把握するところの自由によって、すでに完遂されている」(ebd.)。ここでは、『精神現象学』で Zweifel から敢えて区別された Verzweiflung が、『論理学』の始まりの絶対性(W 5, S. 68)を特徴づける「無前提性」で言い換えられている。これは、一方では、懐疑主義を方法として放棄したことに由来する当然の帰結にほかならない。だが、それは、また『精神現象学』を「学の体系・第一部」として前提する現象学体系の放棄は、Verzweiflung の固有性の否定にまで及ばなければならないことを如実に物語っている。したがって、「すべてに対する絶望」という言葉自体を削除するという『エンツュクロペディー』第3版の処置は、まさに、現象学体系の最後の残渣の根絶を意味しているといわねばならない⁽²⁾。

このように考えるならば、「絶望」が実施される固有の次元を表立って描出した「感性的確信」の章は、そのままでは、エンツュクロペディー体系とは相容れないことになる。事実、『ハイデルベルク・エンツュクロペディー』では、『精神現象学』の「感性的確信」の章の第6節以降が、不用であることが示唆されている(GW 13, § 335)⁽³⁾。なるほど、その理由として、懐疑的方法の放棄が直接挙げられているわけではない。しかし、『エンツュクロペディー』の心、意識、精神の区別に符合するかぎりでの内容だけを残すという間接的な方で、『精神現象学』の「感性的確信」の章に固有なるものがまさしく排去されていると見なさねばならない。

そこで、排去された固有なるものとは、端的に言えば、「感性的確信」の対象たる「ここ」と「いま」、そして、結局、我の身体性である。その中で、その排去が直接に示されているのは、前者の「ここ」と

「いま」である。なぜならば、つぎのようにのべられているからである。「私〔ヘーゲル〕が、私の『精神現象学』（バンベルク、1807年）25頁以降で感性的意識の対象を規定したところによれば⁽⁴⁾、空間的個別態は、ここであり、時間的個別態は、いまなのである。〔だが、〕感性的意識の対象は、より本質的には、〔対象が意識に対して持っている〕関係の同一性に従って受け取られる」（*ebd.*）。この文章は、「ここ」と「いま」は、「関係の同一性」の上からは、「感性的意識の対象」として不適切であることを、事実上語っている。そのことは、この箇所の前半部が、第2版で「私〔ヘーゲル〕が、『精神現象学』25頁以降で感性的意識の対象を規定したところによれば、空間的個別態は、ここであり、時間的個別態は、いまなのである。そして、それらは、本来直観に属する」（*GW* 10, § 418, Anm.）と、より明瞭に修正されていることから判明する。すなわち、「関係の同一性」の上から見ると、「感性的意識の対象」は、意識に対してのみ外的なものとしてあるにとどまるべきである。ところで、「ここ」と「いま」は、そうではなくて、「自立的に外的なもの」「自己外存在」なのである（*GW* 13, § 335, Anm.）。したがって、「ここ」と「いま」は、「感性的意識の対象」ではない、というわけである。

それでは、ここで、「ここ」と「いま」を「感性的意識の対象」から排去する基準となっている「関係の同一性」とは、何か。これは、意識が「抽象的な我」であることを語る規定である⁽⁵⁾。それに対して、「具体的我」とは、「精神」（感情、直観など）にはかならない（*ebd.*）。それゆえに、「ここ」と「いま」は、「我」を二分するという手続きによって、その一方の「抽象的我」としての意識の対象から排去された。しかも、この「抽象的我」は、「A 人間学」の「現実的心」を前提としている。すなわち、心が、自らの外面態としての身体から、自らの内に還帰して、身体を自らにとって疎遠なものとして投げ棄てることによって⁽⁶⁾、意識の主体としての「我」が生成する。かくして、この「我」は、本来、身体的ではなくて、「抽象的普遍」「思考」（*GW* 10, § 415）に限定されるのは、必定である。してみれば、以上のような「抽象的我」の対象としては不適切とされた「ここ」と「いま」に関する『精神現象学』の叙述は、『エンツュクロペディー』の「感性的意識」では、当然不用となる。しかし、ヘーゲルの意図とは裏腹に著者には、「感性的確信」は、「ここ」と「いま」さらには「このもの」について語ることなくしては、何としても成り立たないと考えられる。そして、その所以を見極めるとき、同時に、意識の経験において、懐疑の方法が、まさしく必須のものとして要求される所以が明らかになる。

(3) そこで真理へただちに導かれたいと要求するかもしれない。

und man könnte mit dem Negativen als dem *Falschen* verschont bleiben wollen und verlangen, ohne weiteres zur Wahrheit geführt zu werden;

そこで人は、偽である否定的なものには煩わされたいくないと思ひ、ただちに真理に導かれることを要求するかもしれない。

《註解》ここから判明するのは、意識経験の道は、否定的なものの道であり、否定的なものは、偽でもある。しかし、それが、学の体系第1部であることは根拠づけられていない。

(4) 偽である否定的なものにかかわる理由はあるのか。

wozu[könnte]sich[man]mit dem Falschen abgeben?

いったい何のために偽であるものにかかわりあうことがあろうか。

《註解》 ここでは、(3)の文意を反語文で言い換えている。

(5) だが、ここでは、偽である否定的なものへの問いが生まれる。

— Wovon schon oben die Rede war, daß sogleich mit der Wissenschaft sollte angefangen werden, darauf ist hier nach der Seite zu antworten, welche Beschaffenheit es mit dem Negativen als *Falschem* überhaupt hat.

— すぐにでも学からはじめた方がよいのではないかという、さきにもすでに話の出た問題に関して、ここでは、偽である否定的なものが一般にいかなる事態にあるか、という側面から答えられることになる。

《註解》 ここでは肯定が否定的なものを否定することによって存在するとされている。

(6) 真と偽についての通俗説が真理の門へはいることを妨害している。

Die Vorstellungen hierüber hindern vornehmlich den Eingang zur Wahrheit.

この点についての通俗の考え方は、真理の門に入ることをとくにはなはだしく妨げているのである。

《註解》 次節では、偽である否定的なものが、真理の契機であることが判明する。

(7) 数学的認識についての説明の予告

Dies wird Veranlassung geben, vom mathematischen Erkennen zu sprechen,

またこれを機会に、数学的認識について語ることになるう。

《註解》 つぎに《第41節》では、歴史的真理について語られ、《第42節》から《第46節》まででは数学的真理について語られ、それらが学の真理の典型ではないとされる。

(8) これまで、数学的認識は、哲学の目標でありながら到達できなかったとされてきた。

welches das unphilosophische Wissen als das Ideal ansieht, das zu erreichen die Philosophie streben müßte, bisher aber vergeblich gestrebt habe.

非哲学的な知の見地からすれば、数学的認識は哲学にとっての理想であって、哲学はそれを達成することに努力すべきでありながら、いままでその努力もむなしかった、と考えられているのである。

《註解》 典型的には、デカルトの普遍数学に見られる。

註

(1) さらに、懐疑主義が、認識の有限な形式を見出し、受け取る際の欠点も指摘されている。

- (2) 第2版第78節では、初版の第36節の註の全体のおよそ3分の2が削除され、さらに残された部分の4箇所、字句の修正がおこなわれている。そして、ラッソン版『エンツェクロペディー』の脚注によれば、第3版で、oder vielmehr die Verzweiflung an allemが削除された。
- (3) *GW* 9に記載されている原本の頁数に従えば、第36節で指示されている、『精神現象学』の「25頁以降」とは、「感性的確信」の章の第4節結尾以降であり、しかも「ここ」と「いま」は、第6節で、はじめて導入されている。
- (4) ここまでの部分は、構文が、やや未整理であるが、主として当該の節の註の主旨から判断した。英訳も、ほぼ同じ解釈をとっている。Cf. G. W. F. Hegel; *The Berlin Phenomenology*. ed. & tr. by M. J. Petry, 1981, p. 32.
- (5) Vgl. *GW* 13, § 329; *GW* 20, § 414.
- (6) Vgl. *W* 10, § 412, Zusatz; J. v. der Meulen, Hegels Lehre von Leib, Seele und Geist. In: *Hegel-Studien*. Bd. 2, 1963, S. 265ff.

《第39節》

要 旨

真なるものと偽なるものは、普通は固定した別々の実在である。真理は、鑄造貨幣とは違う。なるほど偽や悪は個体実体ではない。しかし、偽や悪には固有の実在性がある。偽は「他のもの」「否定的なもの」と規定される。実体自身が本質的に否定的である。まちがって知るのは区別の働きである。真理は区別から生成した同等性である。不同性は真理と不可分である。偽なるものは真なるものの構成要素ではない。偽なるものと真なるものとは相互に外側から関係し合っている。真と偽という表現は、同と不同の場面では使われてはならない。真理の構成要素となった偽なるものは偽を意味しない。

(1) 真なるものと偽なるものは、普通は固定した別々の実在である。

Das Wahre und Falsche gehört zu den bestimmten Gedanken, die bewegungslos für eigene Wesen gelten, deren eines drüben, das andere hüben ohne Gemeinschaft mit dem andern isoliert und fest steht.

真なるものと偽なるものとは、それぞれ規定をうけた考えのうちに数えられている。それらは、運動することなく、それぞれ勝手な実在であり、ひとつはあちらに、ひとつはこちらにと、他方との連携なしに孤立し固定している。

《註解》ヘーゲルによれば、真理とは、偽を否定する運動によって生成する。したがって、真理は、偽と連携して運動する。それに対して、ここでいわれている「真なるもの」と「偽なるもの」とは、①運動しない実体であり、②相互に連携なしに対立し合っている。まず、①に適合する学説は不明である。つぎに②については、フィヒテの考え方を念頭に置いていたかもしれない。たとえば「対立し合っているものは、フィヒテにとっては、総合の前では総合の後とは何かまったく別のものである。それらは、総合の前では、ただ対立し合ったものにすぎず、それ以上のものではないということになる」(*GW* 4, S. 39)といわれている。

(2) 真理は、鑄造貨幣とは違う。

Dagegen muß behauptet werden, daß die Wahrheit nicht eine ausgeprägte Münze ist, die fertig gegeben und so eingestrichen werden kann.

この考え方に対して主張されなければならないのは、真理とは、鑄造貨幣のように、できあがったものとして与えられ、そのまま懐に入れておくことはできないということである。

《註解》 真理を貨幣に喩える表現は、レッシング『賢者ナータン』第3幕第6場に見られる。「あたかも真理が貨幣であるかのように」とある。そこには鑄造という表現はないし、真理を貨幣を欲しがるように欲しがるという文脈となっている。ニーチェ「道德外の意味における真理と虚偽について」(1873年)でも真理は貨幣に喩えられてこういわれている。「真理は、肖像が消えてしまってもはや貨幣としてではなくて、いまや金属として見なされるようになってしまった貨幣である」(KSA 1, S. 881)。ここでは鑄造されて肖像が鑄込まれている貨幣は錯覚であり、その肖像が消えて金属に戻った貨幣が真理なのである。

(3) 偽や悪は個体実体ではない。

Noch gibt es ein Falsches, sowenig es ein Böses gibt.

また、一個の偽は、一個の悪が存在しないのと同様、存在しない。

《註解》 ここでは、偽や悪は個体実体ではないことをいっている。だからこそ、つぎの文で、偽や悪は一般的であるとされる。

(4) 偽や悪には固有の実在性がある。

So schlimm zwar als der Teufel ist das Böse und Falsche nicht, denn als dieser sind sie sogar zum besonderen Subjekte gemacht; als Falsches und Böses sind sie nur Allgemeine, haben aber doch eigene Wesenheit gegeneinander.

なるほど、悪や偽といっても、悪魔ほどには忌わしくない。なぜなら、悪魔であるからには悪や偽がまさに格別の主体にさえなっているからである。とはいえ、両者は偽や悪としては、たんに一般的なものにすぎないからである。しかし、やはり偽や悪には対立し合う固有の実在性がある。

《註解》 偽や悪が、『論理学』の用語でいうと「非存在 (Nichtsein)」であることを現象学的に説明しようとしている。一般的であって個別実体ではないが「対立し合う勝手な本質性」つまり反省規定があるのであり、「非存在」は、とりわけ矛盾において顕わになる。なぜならば、Nichtseinとは、存在を否定する存在という矛盾の表現だからである。

(5) 偽は「他のもの」「否定的なもの」と規定される。

— Das Falsche (denn nur von ihm ist hier die Rede) wäre das Andere, das Negative der Substanz, die als Inhalt des Wissens das Wahre ist.

そこで、ここでは偽だけを問題にする。偽は、実体が知の内容をなすものとして真なるものであるかぎり、実体にとって他のものであり、否定的なものである。

《註解》 ここで前文からさらに進んで偽は「他のもの」「否定的なもの」と規定される。精神がみずから「他のもの」になることについては、《第36節》(5)を参照されたい。

(6) 実体自身が本質的に否定的である。

Aber die Substanz ist selbst wesentlich das Negative, teils als Unterscheidung und Bestimmung des Inhalts, teils als ein einfaches Unterscheiden, d. h. als Selbst und Wissen überhaupt.

しかしながら、実体はそれ自身が本質的に否定的なものなのである。それは、内容を区別し規定してゆくことにおいても、また、自己であり知一般という単純な区別の働きを生ぜしめることにおいても、そうである。

《註解》 ここで、実体の自己否定が、まず、自己ないし知一般の「単純な区別の働き」として現象し、それによって、実体内容が対象として知から区別され規定されつつ知を形態化することが示唆されている。

(7) まちがって知ることは区別の働きである。

Man kann wohl falsch wissen.

— もちろん、まちがって知る場合がある。

《註解》 知が自己と対象を区別し、しかもその区別が、知と対象との不同状態になることである。そして、不同状態とは絶対的でないことを絶対的真理と確信することである。この状態を知ることが意識の経験である。

(8) 区別の働きとは実体との不同状態である。

Es wird etwas falsch gewußt, heißt, das Wissen ist in Ungleichheit mit seiner Substanz. Allein eben diese Ungleichheit ist das Unterscheiden überhaupt, das wesentliche Moment ist.

何かをまちがって知るということ、それは、知ることがその実体と不同になっていることである。しかし、まさにこの不同状態こそ、区別の働きであり、これが本質的な契機となっている。

《註解》 実体との不同状態つまり区別の働きが、実体の本質なのである。

(9) 真理は区別から生成した同等性である。

Es wird aus dieser Unterscheidung wohl ihre Gleichheit, und diese gewordene Gleichheit ist die Wahrheit.

この区別があればこそ、そこから同等性もなるほど生ずるわけであって、この生成した同等性が真理なのである。

《註解》 区別は真理の契機であり、ここに『精神現象学』が学の体系第1部であることの根拠がある。しかし『論理学』第2版では、区別は仮象であり、仮象はもはや真理の契機ではない。

(10) 不同性は真理と不可分である。

Aber sie ist nicht so Wahrheit, als ob die Ungleichheit weggeworfen worden wäre wie die Schlacke vom reinen Metall, auch nicht einmal so, wie das Werkzeug von dem fertigen Gefäße wegleibt, sondern die Ungleichheit ist als das Negative, als das Selbst im Wahren als solchem selbst noch unmittelbar vorhanden.

とはいえ、生成した同等性が真理であるからといって、純粋な金属から鉍滓が分けられるように、あるいは、できあがった容器からは道具が見えないように、不同性が〔そこから分離され〕投げ捨てられるようになるわけではない。むしろ、不同性は真なるもの自身のなかでも、否定的なものとして、自己として、なおそのまま現存している。

《註解》 自己は、ここでは、否定的なものと同置されているが、真なるものでもある。この点については《第17節》(1)《註解》を参照されたい。

(11) 偽なるものは真なるものの構成要素ではない。

Es kann jedoch darum nicht gesagt werden, daß das Falsche ein Moment oder gar einen Bestandteil des Wahren ausmache.

しかし、だからといって、偽が真の契機をなしているとか、さらにはその構成要素となっているとさえ言うことはできない。

《註解》 不同性は同等性の契機であるが、偽は真の契機ではない。それは、本節(12)にいわれているように偽と真との間に内側からの関係がなくて、偽は真の外側にあり、真は偽の外側にあるからである。

(12) 偽なるものと真なるものとは相互に外側から関係し合っている。

Daß an jedem Falschen etwas Wahres sei, - in diesem Ausdrucke gelten beide, wie Öl und Wasser, die unmischar nur äußerlich verbunden sind.

どんな偽なるものにも何か真なるところがあるなどと言われるが、こうした言い方をするときには、真と偽とは、水と油のように、まじり合わずに、ただ外側から結びつけられている。

《註解》 当該文は、前文の理由になっている。内側からの関係がまじりあうという比喻で表現されている。

(13) 真と偽という表現は、同と不同の場面では使われてはならない。

Gerade um der Bedeutung willen, das Moment des vollkommenen Andersseins zu bezeichnen, müssen ihre Ausdrücke da, wo ihr Anderssein aufgehoben ist, nicht mehr gebraucht werden.

「真」と「偽」という表現は、まったく他であるという契機をあらわすところの意味をもっているからこそ、両者の他であることが揚棄されている場面では、もはやその表現が使われてはならないのである。

《註解》「まったく他である」はここでは否定的な意味で使われているが、「まったく」を取れば、自己の構成要素でもある「他であること」になる。

(14) 真理の構成要素となった偽なるものは偽を意味しない。

So wie der Ausdruck der Einheit des Subjekts und Objekts, des Endlichen und Unendlichen, des Seins und Denkens usf. das Ungeschickte hat, daß Objekt und Subjekt usf. das bedeuten, was sie außer ihrer Einheit sind, in der Einheit also nicht als das gemeint sind, was ihr Ausdruck sagt, ebenso ist das Falsche nicht mehr als Falsches ein Moment der Wahrheit.

主観と客観との、有限と無限との、存在と思考との統一など、といった表現についても同様である。「主観と客観」等々という表現は、両者が統一の外にあるかぎりでの事態を意味しており、したがって、統一の中では、それらの表現が意味するものとして考えられてはいないという不都合が存する。同様に、偽なるものが真理の契機であるとき、それはもはや偽なるものとしてなのではない。

《註解》「今日は晴れている」が真であれば、「今日は雨天である」は偽であるが、「今日は曇天である」「今日は雪が降っている」等々の命題も偽である。しかし、主観と客観との統一が真理であれば、主観も客観も非真理であるから、主観が真で客観が偽であることもなくなる。

《第40節》

要 旨

独断主義は命題に関する思い込みである。歴史年代、測定値、幾何学の定理には確定した答えや命題がある。哲学的真理は、きっちりとして固定した命題にならない。

(1) 独断主義は命題に関する思い込みである。

Der Dogmatismus der Denkungsart im Wissen und im Studium der Philosophie ist nichts anderes als die Meinung, daß das Wahre in einem Satze, der ein festes Resultat ist oder auch der unmittelbar gewußt wird, bestehe.

知において、また哲学研究において、独断主義の考え方というのは、つぎのような思いこみ以外の何ものでもない。すなわち、真なるものは、固定した結果である命題か、あるいは直接的に知られる命題のなかに成立しているのだ、という思いこみである。

《註解》ヘーゲルは、意識の思い込みを自己吟味する懐疑主義と、自己吟味しない独断主義を対比さ

せている。それは、真理を命題に見る立場と、体系に見る立場の対比をもたらす。Vgl. *Enzy.* § 32

(2) 歴史年代、測定値、幾何学の定理には確定した答えや命題がある。

Auf solche Fragen: wann Cäsar geboren worden, wie viele Toisen ein Stadium betrug usf., soll eine nette Antwort gegeben werden, ebenso wie es bestimmt wahr ist, daß das Quadrat der Hypotenuse gleich der Summe der Quadrate der beiden übrigen Seiten des rechtwinkligen Dreiecks ist.

たしかに、シーザーはいつ生まれたかとか、1 スタディオンは何トワーズの長さだったかといったような問いに対しては、きっちりと答えるべきである。同様に、また、直角三角形の斜辺の平方は他の二辺の平方の和に等しい、という命題は、確定的に真である。

《註解》 これらの事例は、つぎの節で説明される歴史記述や数学の真理である。スタディオンは古代ギリシャの計量単位で約 185 メートルに相当し、トワーズはフランスでかつて用いられた計量単位で 194 メートルに相当する。

(3) 哲学的真理は、きっちりとして固定した命題にならない。

Aber die Natur einer solchen sogenannten Wahrheit ist verschieden von der Natur philosophischer Wahrheiten.

しかし、同じく「真理」とよばれていても、こうした種類のものと、哲学的真理とは、本性を異にしているのである。

《註解》 哲学的真理には、歴史記述的真理のようにきっちりとした答えもないし、数学的真理のように確定した命題で表現されることもない。

〔2〕 歴史記述的真理と数学的真理

《第 41 節》

要 旨

歴史記述的真理は偶然的現存にかかわっている。歴史記述や幾何学の真理にも自己意識の説明が関与している。調査も自己意識の運動である。また、直接の直観による真理にも根拠が要求される。

(1) 歴史記述的真理は偶然的現存にかかわっている。

In Ansehung der historischen Wahrheiten, um ihrer kurz zu erwähnen, insofern nämlich das rein Historische derselben betrachtet wird, wird leicht zugegeben, daß sie das einzelne Dasein, einen

Inhalt nach der Seite seiner Zufälligkeit und Willkür, Bestimmungen desselben, die nicht notwendig sind, betreffen.

歴史記述的真理にかんしては簡単に言及することにし、その純粹に歴史的であるところを考察するだけにしよう。容易に承認されることであろうが、歴史記述的真理は、個々の現存にかかわるのであり、内容の偶然的で恣意的な側面、すなわち個々の現存の必然性のない諸規定にかかわっている。

《註解》 歴史記述的真理とは、シーザーの生年やスタディオンのトアズへの換算方式のことである。

(2) 歴史記述や幾何学の真理にも自己意識の説明が関与している。

— Selbst aber solche nackte Wahrheiten, wie die als Beispiel angeführten, sind nicht ohne die Bewegung des Selbstbewußtseins.

——しかし、すでに例としてあげたような、明白な真理でさえも、自己意識の運動なしにはない。

《註解》 自己意識の章以降に歴史記述や幾何学の真理についての言及はないが、自己意識的理性の段階に位置づけていると推察できる。

(3) 調査も自己意識の運動である。

Um eine derselben zu kennen, muß viel verglichen, auch in Büchern nachgeschlagen oder, auf welche Weise es sei, untersucht werden;

こうした真理の一つを知るためにも、いろいろ比較がなされ、多くの書物が参照され、等々、いかなる仕方でもせよ、調査されなければならない。

《註解》 比較、書物の参照などは調査であり、調査は自己意識の運動である。

(4) また、直接の直観による真理にも根拠が要求される。

auch bei einer unmittelbaren Anschauung wird erst die Kenntniss derselben mit ihren Gründen für etwas gehalten, das wahren Wert habe, obgleich eigentlich nur das nackte Resultat das sein soll, um das es zu tun sei.

また、直接に直観する際も、元来明白な結果だけが問題であるはずなのにもかかわらず、その知見は、しかるべき根拠をそなえてはじめて、真の価値をもったものとされるのである。

《註解》 次節から、「直接の直観」とは、図形の直観などを指している。

引用略記号

GW : Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Gesammelte Werke*. Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1968ff.

W : Georg Wilhelm Friedrich Hegel: *Werke in zwanzig Bänden. Auf der Grundaufflage der Werke von 1832-1845 neu editierte Ausgabe*. Redaktion: E. Moldenhauer und K. M. Michel, Suhrkamp Verlag, Frankfurt am Main, 1969-1979.

KSA: Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe*. Hrsg. v. G. Coli und M. Montinari, Walter de Gruyter & Co., München/Berlin/NewYork, 1999.

Explikation der Vorrede der *Phänomenologie des Geistes* Hegels (die Absätze 38–41)

YAMAGUCHI Seiichi

Zusammenfassung

Hegel will zwar den Begriff der Wahrheit in der Vorrede der *Phänomenologie des Geistes* (die Absätze 38–41) verändern. Aber man hat das exakte Verständnis dafür und diese Wichtigkeit mit übergesehen. Der Verfasser macht nun den Kommentar und die Abkürzung der sogenannten Texts und erörtert dadurch den Zusammenhang des Stammbaums der grossen Theorien der neuzeitlichen Philosophiegeschichte mit dem Begriff der Hegelschen Wahrheit.

Keywords : Wahrheit, das Negative, das Wahre und Falsche